ワットパクナム寺表敬訪問団随行記

竹内正躬

私は十数年前から上座部佛教國『タイ』訪問を念願として居りました。この間、バンコック観光旅行に参加する機会はありましたが、私の願いとする佛教國で王国『タイ』を見聞する旅とは無縁のものでした。

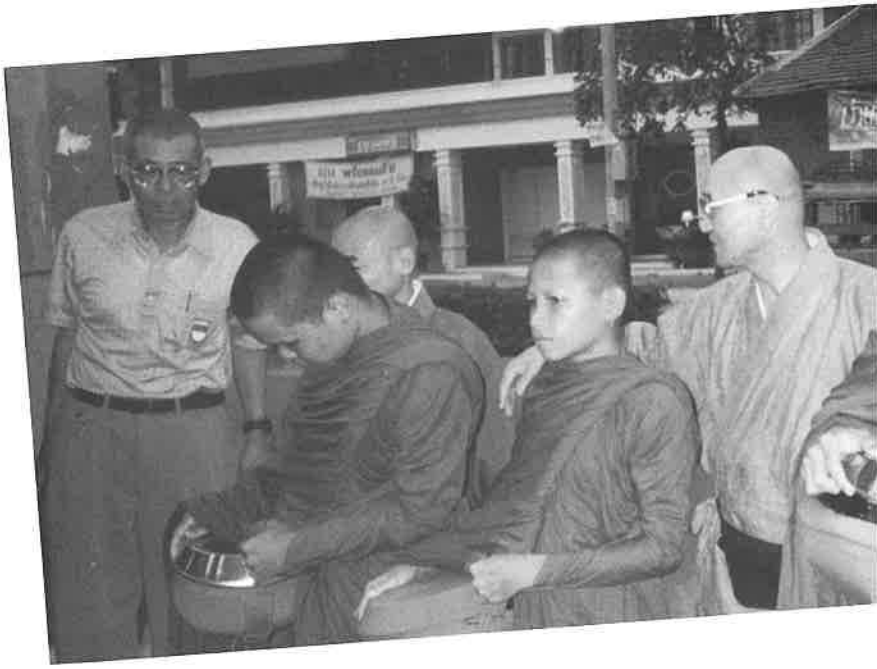
今回、神奈川第二宗務所第五教区主催の「ワットパクナム寺表敬訪問団」結成を知り、率先参加を申入れました。ところが、出発直前に家

右・筆者

族がこの参加を知り、八十九歳の高齢であり同行の人々に迷惑をかけるからと中止するよう申してきました。私は一寸躊躇しましたが、お粥のパック五ケ・御茶のパック五ケ・小型の電気ポットを用意しての出発となりました。

出発初日、バンコック空港で国内機に乗り換え古都チェンマイ市の宿舎に夕刻に到着。ホテルのロビーに天皇・皇后陛下の宿泊記念写真が飾られて居り驚きの声が挙がりました。

翌朝は四時起床。ホテル前の小径で托鉢僧を待つ事数分。裸足で首から穀物を入れる頭陀袋と両手に鉢を掲げて、僧侶達が音もなく暗闇の中から浮き上がってくるような感じでした。用意した紙幣を鉢の内に入れると合掌にて受け当方も合掌にて応え、言葉は不要で所謂阿吽の呼吸と言うか一瞬にして視界から消えていった。托鉢行を見送るという念願の体験をしました。五時にドイステップ寺院に向かいました。寺院



から「北方のバラ」と称されるチェンマイ市を一望できる筈でしたがかすみの中でした。

熱帯樹林の山頂に金色の舎利塔をはじめ、朝日に燦然と輝く堂塔は、まさに聖地と思わせる幻想の天地でした。ドイステップ寺の入口から車を乗り換えメオ族の集落を経てチェンマイ市内へ戻りました。チェンマイ寺院では、大勢の市民が天を仰いで、七十年に一回という金環蝕を観測していました。わたしにとりましても初めての経験で、難値難遇の好機会でした。午後、国内便でバンコクに戻りシャングリラ・ホテルに投宿しました。

翌日は、ワットパクナム寺を表敬訪問しました。十時に、大殿と言うべき大広間に到着し、三百人程の修行僧と昼食を共にしました。修行僧は二尺程高い所で、私共はテーブルで同じ食事をとりましたが、一段下の床の上では、約百人位の市民が、ある者は正坐し、ある者は胡坐で、この食事を見守っておりました。これらの人々は本日の食事を寄進した人たちです。

食事の後、僧侶が読経し、退場する際、人々は合掌して見送り、この時の表情は、とても満ち足りたものでした。わたし共は僧侶の後から退場しましたが、聞くところによりますと、これら市民の人達は残飯を一匙ずつ戴いて帰ったとの事でした。それからこの大広間から、本堂にあたる大塔に移りました。この堂内の正面には、金色燦然と輝く高さ数米程の本尊釈迦牟尼仏があり、この前で、団長を導師に全員で般若心経を読経し表敬訪問の祈りを捧げました。引き続いて、団長が住職に訪問の挨拶を言上した所、先方より歓迎の言葉と記念品を頂き、私共は満ち足りた気持ちで訪問の行事を終えました。

仏教は、タイ国の国教で僧侶は国民の畏敬の的です。男子は中学校卒業より大学卒業の間必ず一年間仏門に入り修行する様です。少年僧か

筆者(左)とパクナム寺住職(右)

ら最高位の老僧まですべて同じ淡木らん色の法衣を纏い、所持品や外見から、私には僧侶の階級を見分ける事はできませんでした。堂内はすべて石畳で、僧侶も一般市民も裸足で顔面を床に擦り付け体を大地に投げ出すいわゆる五体投地の拝礼を三回おこなっており、釈尊在世の証跡を見る思いでした。私はひとりで本堂に戻り、再度、本尊釈迦牟尼仏に礼拝を致しました。仏様の口元にはかすかな微笑が見られ、「老僧良く来たな」と言っている様であり、私の妄想と思いながら退山しました。

今回の旅行の最終日、古都アユタヤ訪問は河川出水のため中止となり、残念の余韻を残し、無事成田に帰ってきました。

ワットパクナム寺表敬訪問団随行

思い出の句

伊藤　美智子

黄衣の僧あふれチェンマイ秋安泰
菩提樹の蔭をくぐれば秋気澄み
日蝕に秋のメオ村総学者
月光を奏でるプールの水沫き
紫蘭咲くホテルロビーは別世界
悠久のメナムを染めるビルの灯
土嚢を足探りゆく秋出水
マーブル寺三部合唱読経澄み
エメラルド寺風鐸秋空ささやけり
ラマヤーナ壁画をなでる秋日和
秋衣釈迦参拝団に笑みたもう
秋暑し僧の瞳は釈迦牟尼仏